特集にあたって

養育を担う大人として、愛着の再生とどう向き合うか

中日青葉学園副学園長 わかば館 館長　近藤 日出夫

家庭的養護推進計画の流れを受け、全国の児童養護施設は本体施設を縮小し地域小規模施設を含めたグループケアを進め、より小さなグループによる家庭的な育みができる形態に変わろうとしています。子どもたちにとっては小さな集団による濃密な人間形成が期待されています。近年入所に至る子どもたちの多くは被虐待児が中心となり、そのため子どもの中には、愛着が歪んだ形で刷り込まれてしまった状態で施設にやってくる子がいます。つまり心の安全基地を持たない状態で小学校期、中学校期まで家庭で暮らしてきたような子どもたちです。親と子どもの健全な関係を結んでこなかったわけですから、危機的な状況に追いこまれたような時にはもろに感情のコントロールが崩れていきます。表情が乏しく自分を無視したと勝手に思いこんだりして、他児とのトラブルとして表面化します。親子の健全な二者関係を通じた学習をしていないわけですから、心配や不安に直面すると防御するすべがないことになります。幼少期に大事に育たなかったということは、例えば子どもが転んで痛い思いをした際には、養育者はその痛みを共有するために痛いときの表情を作りながら、痛かったんだねという仕草を通して自然に子どもは親が守ってくれる存在だということを学習をしていきます。施設に暮らす子どもたちはこうした共感的受容の経験が圧倒的に乏しいため、日常生活のなかで人に迷惑をかけても自分の感情（情動）が優先しますので、暴れてガラスを割って何が悪い、自分はもっと苦しんでいるんだと、自分の行動そのものを肯定してしまう考えに至るケースも少なくありません。行為障害のようなケースは特にこうした傾向が高いと経験から学んできました。ですから育ち直しには途方もない時間と関わる職員の粘り強い支援が求められるわけです。

職員を含め誰しも自分の生い立ちがベースとなって価値観が形成されていますし、人に会ったら気持ちの良いあいさつを返したり、お世話になったりすればお礼をいうことは常識として家族間の中で学んできています。私が強調したいのは、そうしたごくごく自然の営みの中で形成されてきた事柄を施設の子どもたちには後付けで教育していかなければ身につかないということです。ですから職員の立ち居振る舞いは大切なのです。だらしなくズボンをはいたり、しわくちゃなシャツで出勤してきたりすることは修正的な関わりが求められる私たちは戒める必要があります。どの施設においても家庭の代わりをする視点と子どもたちの社会化を意識した生活がとても大切だと考えます。つまり基本的な生活の全てに意図的な援助支援の要素を織り込んでいかなければいけません。

意図的な生活支援とは例えば環境を整える、平たく言えば自分の住んでいる空間をきれいに片づけることも環境調整につながっていきます。お友達と折り合いをつけて生活をしていくことも大切な要素です。環境整備の際に大きなごみ袋を子どもに見せると、たくさんの人がごみを持ち寄るとごみ袋はいっぱいになるという概念は私たちに至極当然に認識できますが、生活課題を抱える子どもたちには、目先にある大きなごみ袋でモチベーションが下がってしまいます。小さなごみ袋を配布してこれならすぐにいっぱいにできると感じたり思ったりするなかで、子どもをその気にさせることは可能です。こうした日々の積み重ねを創意工夫しながら、達成感や共感性を育てることで他者との協調性や人から信頼されるということを学んでいきます。

日常生活の中で自分の力では解決が難しい事柄を共に手を携えて一緒に問題の解決に取り組む姿勢を職員がみせながら、子どもたちにも努力義務を課していくことは強制でもなんでもないと考えています。子どもの育ち直しとはこうしたことの繰り返しが前提でなければ成し得ないというのが私の考えでもあります。誰かのために尽くすことを学ぶには大事にされ甘えてもいいということを学んだ上で、各施設でセカンドステップを図っていく取り組みが求められています。